

未来バンク

すべての人がおカネに意志を持たせる社会にする

ニュースレター 第5号 2020 DEC

【コンテンツ】

1. 田中 優
2. 奥田 裕之
3. 出資者の活動紹介 大河内 秀人さん 見樹院住職（第20世）/ 寿光院住職（第17世）
4. 総会開催報告

田中 優 理事長

Tanaka Yū



「善意ビジネス」から 善意とビジネスを分離して

「クラウドファンディングとは、インターネットを介して自分の夢や想いを世の中へ発信し、その活動を応援したいと思ってくれた不特定多数の人々から少額ずつ資金を募る仕組み。支援してくれた人へのお返し（リターン）をつけることで、さらに魅力を増していく。」という。

もしあなたに自己資金がなくて、それでも実現したい何かがあって、それが多くの共感が得られる確信があった時に、その資金を集めるために呼び掛けるとしたらいいのかもしれない。

しかしその業界の手数料は大きいのだ。たとえば「業界最安水準の手数料」と言っている「某クラウドファンディング」を活用したとしても、「手数料7パーセントと決済手数料5パーセントで合計12パーセント」もかかる。さらに「お返し（リターン）」をつける。これが案外大きい。なぜかと言うと、「多くの共感が得られる」「少額で多数の支援」を集めるのだから、リターンは「数多くの少額寄付者」に返さなければならないのだ。たとえば1000円出してもらったとしても、リターン品の郵送費に80円かかってしまう。

それだけで何と八パーセントだから、手数料と合わせて20パーセントになってしまう。ちなみにサラ金の現在の金利を見てみよう。

今はかつてのような暴利は取れないように、利息制限法に従って以下のような金利しか取れない。10万円以下なら20パーセントの金利が上限なのだ。なんと中身を入れていない業界最安値の仕組みを利用してもすでに「利息制限法」に従うサラ金と同じだけ金利がかかってしまう。集める金額が10万円を越えるのなら、「クラウドファンディング」の実質手数料の方が「サラ金」の実質金利よりも高くなる（表1）。

■利息制限法による金利の上限

10万円未満	20%
10万円～100万円未満	18%
100万円以上	15%

（表1）

もちろんこれは寄付だから、債務ではない。債務としては事業者に払う手数料だけになる。でも取りそびれては困るから、寄付は事業者自身の管理する口座にするだろう。

そして「オール・オア・ナッシング」の仕組みで集まらなければ成立しない仕組みだから、カネを取りはぐれるリスクがある。当然業者はそれを「業」として生計を立てるのだから、寄付集めにも必死になるだろうし、本人とは別な口座にするだろう。そこで寄付を集めるコツを伝授する。

おそらくこう言われるだろう。「寄付してくれるのは家族や親しい友人だから、挨拶や年賀状を出す範囲の人たちには必ず伝えるように」と。そしてリターン品を考えると、「数多くの少額寄付者」は手間がかかって利益が少ないから、当然「大きな額の寄付口」という枠を勧めるだろう。それに伴って多額のリターンが必要になってしまうのに。

ここでふとこの形態を考えると、「保険外交員」と似てくことに気づく。つまり自分の身内に信用を売らせて、その人たちを契約者として利用することで外交員として収入を得る仕組みだ。だから親戚・友人などを使い果たすと「保険外交員」はお払い箱にされる。契約の採れない(つまり営業成績の悪い)外交員だから。

こうして考えると、「クラウドファンディング」はその人の信用や信頼を担保にして寄付を集めさせ、そこから事業者に勤める人たちの生活費を稼ぐ仕事になる。有名だったり有名人と知り合いだったり、信頼を集めている人で稼ぐ仕事なのだ。

たいがいクラウドファンディングを何度もすることはないだろう。なぜならそれだけの信頼があるのなら、自分で集めれば手数料も払わなくていいし、リターン品で悩む必要もないからだ。ここもまた信用力が非常に高いわけではない人に外交員をさせる生命保険会社と似てくる。

多数の善意の人を山車にして稼ぐ仕組みになる。こういう業態をばくは「善意ビジネス」と呼びたい。善意は金儲けから見ると、「ビジネス」になるのだ。

もちろん「クラウドファンディング」は寄付の仲介だから返済義務はない。リターン品を戻さなくても業者が債務不履行に問われることもない。しかしそのスタッフが食べていくためにはその位の手数料が必要なんだろう。

直接寄付するのと比べると、手数料とリターン品が余

分にかかる。寄付者とクラウドファンディングをしようとした者の分を合わせて、その分だけ取られていることになる。

■未来バンクの仕組みをクラウドファンディングに

未来バンクは融資だが、理事らはほぼ無給で働いている。そして融資の金利もなるべく低くしようと努力している。それは「営利」でない仕組みで市民がしようとする事業を支えようと考えているからだ。こういう事業をやっていると、何を勘違いしたのか詐欺的な事業者もやってくるが、お断りするだけだ。そしてほとんどの相談は、非営利で公益的・共益的な事業を実現しようとするものだ。そうしたことに助力している。

未来バンクの融資方法の一つに面白い仕組みがある。「特定担保提供融資」がそれで、他の組合員が自分の出資金を、特定の融資に担保として提供してくれれば、その融資は金利1%で融資を受けられる仕組みだ。

私たちの融資金利はそもそもこう考えて作られている。もし100人に融資したら、2人位は返済できなくなる人も出るだろう。つまりそのリスクは約2%程度になる。そして郵送や連絡、振込手数料にかかる費用が約1%、合わせて3%の金利としたのだ。だからもし他の組合員が自分の出資金を担保として提供してくれるなら、返済リスクはその組合員の人が負担してくれているので消え、すると金利・手数料合わせて1%で融資できるはずだと。

つまり他の組合員が融資のリスクを分担してくれれば、未来バンクは最低の金利・手数料だけで融資できるのだ。

この仕組みをクラウドファンディングに生かしたらどうなるだろう。手数料は要らないし、他の組合員が「この資金分は特定の寄付先に出しても良い」とするなら、融資リスクもない。

つまり手数料のみで実現できるのだ。先に出資しておいてくれれば、その先は確認できる形で「移転する意思」を表示してもらえればいい。あらかじめ未来バンクに出資しておいてくれれば、その処分権は出資した組合員自身にある。それを自分の出資から誰かへの寄付として振り替えるのだ。

ただし何のためにどれだけ使いたいのかは明示してもらおう。そして融資と同様に資金を振り込んで、組合員の出資額を内部的に組み替える。それによってずっと手数料が少ないクラウドファンディングを、組合員内で行うことができるのではないか。

そもそも融資は組合員にしかしていないし、しかも出資額は組合員自身のものだ。その額が確定するのは毎年の決算の時であり、それ以外の時期には資金は事務局が保管、管理している。ならば毎年の決算時にきちんと管理されていれば、可能なのではないか。

職員の給与のために無理をしなくても、極めて低い金利・手数料で実現できるのではないだろうか。その仕組みを発展して考えれば、自分たちの中から寄付することで学資を寄付したり、貧困を解消したりすることができるかもしれない。

未来バンクには若手のメンバーたちがいるから、ニーズの把握や事業の健全性などを判断してもらって、新たな仕組みを始めたい。さらに形を変えて、何かモノを買う形でもいい。リターンを農産物や物品などを購入する形もあり得る。納税をどうするかの問題は残るが。

善意の資金は「ビジネス」に似合わない。善意の資金は善意のまま、社会的な利益以外のリターンを求めずに行ってほしい。そのための仕組みが作れないだろうか。

奥田 裕之

Okuda Hiroyuki

日本社会とブレイディみかこさんのこと

ときどき「ブレイディ・みかこさんの著書『THIS IS JAPAN :英国保育士が見た日本』に、なんで名前が載ってるんですか？」と聞かれることがある。未来バンクでも聞かれたが、実は何人かは一度会っていることを覚えていないみたいだった。ここでは短い時間だったがブレイディさんの仕事に協力したことについて書きたいと思う。

■本に協力することになったきっかけ

イギリス在住のブレイディさんのことは、まだ作家になる前の彼女がセックス・ピストルズのジョン・ライドンの最新ニュースを自分のブログで紹介していたことで知った。同世代で、若い頃に同じようなパンクロックを聴いていたので「面白い人がいるな」と思ってブログをよく読んでいた。

ある日、彼女のブログに「日本のソーシャルセクターについて本を書いてくれと頼まれたので、誰かアテンドしてくれませんか」という記事が載っていた。そこへ「ジョン・ライドンの記事を楽しみにしていたし、そんな感じの仕事をしているからお礼に手伝いますよ」と連絡したことが、本にかかわるきっかけだった。

■初めて会った日に話したこと

何回かイギリスと日本でメールのやり取りをして



から、2015年の初めに彼女が帰国した際に、新宿の喫茶店で初めてお会いした。

ブレイディさんは、「イギリスでは第2次世界大戦後、社会的に困難な状況にある人たちが中心となって、戦争に勝ったチャーチルの保守党を選挙で落選させ、労働党政権が出来たんです。イギリスの「ゆりかごから墓場まで」と言われる充実した社会制度はその時にできていて、イギリス人の多くは自分たちがその制度を作ったと考えています」、「労働党のシンボルは赤い薔薇なんですけど、日本にそういう象徴はないんでしょうか」と話していた。（ケン・ローチ監督の映画「1945年の精神 (THE SPIRIT OF '45)」にそのあたりのことは詳しい）

ぼくは、「NPO法を作ったときは少し近いものがあったと思いますけど、全国的な動きかというところは違いますね。取材の中で何か兆しが見つかるかと良いんだけど」と答えたと思う。

■協力した2つの取材

『THIS IS JAPAN：英国保育士が見た日本』では、ホームレスの方たち自身が起業した「企業組合あうん」の設立者である中村光男さんと、以前にアムネスティ・インターナショナル日本の事務局長だった寺中誠さんという信頼する2人をご紹介します、取材にも同席した。

本では、貧困問題を俯瞰的にとらえ、リアルな場所で活動と事業を続けてきた中村さんのことを「山谷のカストロ」と紹介していた。ちょっと褒めすぎという気がしないでもないが、確かに彼の活動と視点は他にはなかなか例がない。寺中さんの本での出番は短い、「社会の中で厳しい状況に置かれてしまった人を支えるために制度というバケツがあるが、しかしそのバケツにはけっこう穴が開いている。そこからもれてしまった人をギリギリのところで受け止めるのが「人権」なんです」と、この本をまとめる本質的な話をブレイディさんにしていた。

詳しい内容は本を読んでもらおうとして、いくつかのエピソードをご紹介します。

中村さんと会ったのは、彼女が日本に来て最初の頃だったと思う。これから日本でどんなインタビューが出来るんだろうと、ワクワクしている感じが伝わってきた。2人で「あうん」に出かけ、お話し後に三ノ輪駅近くの店に飲みに行った。途中から酔っぱらったので実はよく覚えていないのだが、3時間以上は話をしていたと思う。話した内容は、イギリスや日本のロックバンドと社会についての話だった。スミス、ストーン・ローゼズ、ルースターズといったバンドの話で盛り上がったことと、社会はどのように変わっていくんだろうかといった話をしたことは覚えている。

彼女は「イギリス人は、パブで音楽と政治の話をするのが好きなので、こんな感じの話を年中しているんですよ」と話していた。それにしてもブレイディさんはメチャクチャ酒が強かったな。

寺中さんのインタビューは少し後に出版社で行われた。その時には、最初に想定（期待）していた日本と実際に見聞きしたものの違いに、少し元気が無いように見えた。インタビューのあと、その日の夜に行う取材にも同行しないかと誘われた。予定があったのでお断りしたが、その取材が本の最初に出てくる「キャバクラユニオン」だった。

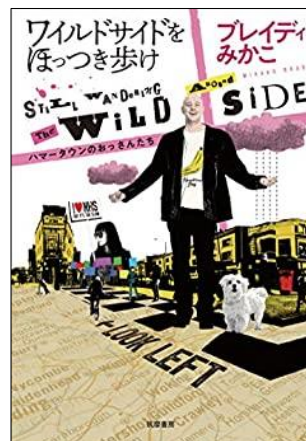
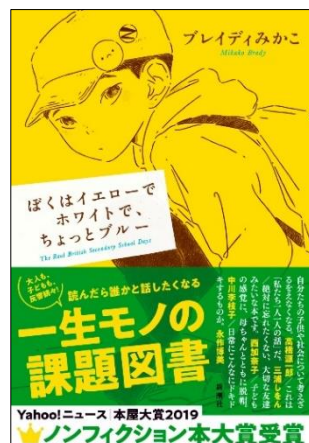
そこは苦しい者がさらに苦しい者を糾弾する現場だったようで、想像だが彼女がポジティブなものを日本のソーシャルセクターに見いだそうとした気持ちを、かなり打ち砕いたんだろうと思う。

■出版、その後

ブレイディさんから「本が出来ました」と連絡があったのは、2016年の夏だった。まとめ方に悩んでいたようだったので、「どんな本になるんだろう」と少し心配していた。内容は皆さんが読んだ通り（まだ読んでいない人は、買って読んでください）。ぼくはとても良い本だと思います。

ブレイディ・みかこさんとは、その冬に日本の書店で行った企画に行って再会した。それからのブレイディさんは、彼女の本職でもある「子どもの問題」や、「女性の問題」「イギリスの政治」「音楽」などについての本を連続して書き、2019年「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」がベストセラーになった。

彼女は、おそらく日本のソーシャルセクターの中に希望を見つけることができなかったと思う。ぼくは職場を辞めたが相変わらず希望の見いだしにくい分野で仕事を続け、彼女との接点は薄くなってしまった。それでも、いつか彼女がまた日本社会を取材したいと思えるような状況になったら、音楽と政治の話でもしたいと思っている。



ブレイディ・みかこさんの著書

出資者の活動紹介

大河内秀人さん

▷ 見樹院(東京都文京区)住職(第20世) / 寿光院(東京都江戸川区)住職(第17世)

▷ HP : <https://nam-mind.jp/>



見樹院アーバンパーマカルチャープロジェクト

未来バンクの古くからの出資者で、見樹院の住職でもある大河内さんから「見樹院アーバンパーマカルチャープロジェクト(以下、見樹院PJ)」について、理事の田中悠輝がインタビューしてきました!

「見樹院PJ」とは、見樹院が新たに取得した土地に天然住宅でお家を建てて、地域コミュニティの拠点をつくるプロジェクトです。1階は天然住宅のオフィスやコワーキングスペース、2階は居住空間となる予定ですが、コロナ禍で一時中断されていました。今回はその再始動ということで取材してきました。

(インタビュー映像も撮影しましたので、そちらは後日「天然住宅」のYoutubeページにて紹介予定です。)

■見樹院アーバンパーマカルチャープロジェクト

ー 今回のプロジェクトはどういった経緯で始まったのですか?

始まりは、10年前の本堂の建替えに遡ります。

昭和40年頃に建築された本堂が今の耐震基準には合わず、これからお寺はどうあるべきかということも含め、建替えの話が出ていましたが、檀家の少ない寺で資金的にも行き詰っていました。

そこで私が30年来活動を共にしてきた田中優さんの縁で、ちょうど10年前に、100年の定期借地権付き天然住宅仕様の分譲住宅をコーポラティブで建設しました。

本堂の建替え以来、いろいろな可能性がこの場所で湧きあがり、思いを持った人たちがたくさん集まるようになりました。ただ発信をするだけではなく、一人一人の未来に対して確固たる指針や目標になるような、そういう“暮らし”に貢献できるものがないかなと考えてました。

たまたま隣の土地が空いたところで「じゃあここで今度新しい暮らしの場を作りたい」と、今回のプロジェクトを立ち上げました。



大河内秀人(おおこうち ひでひと)

見樹院職(第20世) / 寿光院住職(第17世)。東京都江戸川区内で、環境団体「足元から地球温暖化を考える市民ネットえどがわ」、子ども支援グループ「江戸川子どもおんぷず」に設立からかわり、地域の有志と一緒に取り組んでいる。

また、宗教宗派、国境を越えた仏教者・宗教者とのネットワークにも積極的に参加し、平和・人権・環境などの活動に取り組んでいる。

■コミュニティの一つの拠点として続いていく

ー 新しい暮らしの場というのはどういったものなのでしょうか？

変わらない安心感と変わっていく力強さを育みたいんです。

この寺は300年も歴史があるわけなんですけど、100基くらいのお墓が並んでいて、後を引き継ぐ人がいないという方が一定数いらっしゃるって。

そういう方たちは、将来お墓がどうなってしまうのだろうと心配されているんですね。後を引き継ぐ人がいても、自分たちの孫がちゃんと続けていけるのだろうかと、お墓を残していけるのだろうかと心配に思う方々もおられて。



300年前の大名関係の寺なので、それなりの誇りと責任を持って守ってきた人たちのお墓です。その将来に対して、300年住宅を謳っている天然住宅の建物と、その暮らしと一緒にこの空間が

残っていくんだというイメージを持って、一つの希望や安心感に繋がってほしい。

一方、時代の中で当然お寺の役割というものも変わってきましたし、檀家さんたちの家族構成や生活の状況なども変わってきた中で、お寺としてはどういうことをすべきか、皆さんに何が求められているのか、というような議論を20年くらい関係者の人たちとしてきました。

その中で共有してきたことは、この場所をコミュニティづくりの場にしたいということ。変化する状況の中でコミュニティの一つの拠点として続いていける空間があり、そういう新しい暮らしの実践の場があれば、非常に心強いかなと思います。

■“生きたい”という思いの受け皿

ー お寺の役割が変わってきたというお話ですが、現代においてお寺はどんな役割を果たすべきだと考えていますか？

お寺は命を通して過去と未来と向き合える場です。

私が住職になったのが今から30数年前なんですけど、その頃お寺に来る人たちの多くは戦争未亡人であったり、あるいは家族を亡くされた方、それから戦友会の役員の方だったりで、ある意味その人たちは戦争を美化する面もあるけれど、実際には周りの人の中で自分が生き残ったというひとつの負い目をもっている。

見樹院の歴史

■東京・小石川にある300年続く寺

鎖国令の出た寛永10年（1633）9月16日、丹波国（京都府）桑田郡亀山城主大給松平左近将監源成重侯が卒し、その法名を見樹院殿覚誉円徹大禅定門と称して、小石川伝通院に埋葬しました。

延宝3年（1675）、後嗣である豊後国府内（大分市）城主大給忠昭が、見樹院殿霊位の追善供養のため、伝通院山内に、大給松平成重を開基とし、諦誉直絃上人を開山上人として迎え別院を建立、見樹院と称しました。

以後、大給家代々の菩提所となると共に、伝通院の塔頭寺院となり、明治から今日に及び、300年以上の歴史を持つ、浄土宗の寺院です。





そういう人たちとずっと付き合ってきたので、それがなんでこういうことになったのかということを考えていくと現代のいろんな問題につながる。

ではその問題の根本は何かというと、“正しいことが正しいんだ”と言えないこと、そして自分自身が感じる人間として命のレベルで求めている“やっぱり生きたい”という思いの受け皿がないことです。

自分の家族に生きて幸せになってほしいという思いを踏みにじるような事がずっと行われてきている。最近でも福島の人たちであるとか、原発の立地地域の人たちであるとか、あるいは被曝労働者の方たちと実際に接して、その様子を聞いたり話をしたりする中で、倫理というか、命の尊厳を尊重することが失われていると感じたんですね。

そのような状況の中でも、みんなが命を大事にできるような社会に進んでいくために、私たちの思いを形にしたいというのが一つ大きな目標になっています。

ここに来ればそういう生き方をしたいんだという勇気や一つの確信が持てるような、そんな場にしていかなくちゃいけない。そういう人たちが集い、本当に自分の人生の中でそれを位置づけていくというのかな。

お墓というのは先祖がいて自分がいて子孫がいて、これから人生の中でも幾度となくここを訪れるという一つの大きな時間軸の中で、命というイメージを感じる場所だと思うんです。

お寺との関わりの中で、それをもう少し具体的に考えられる機会にできたらいいと思います。どういう明日があるのか、50年後、100年後があるのか、それはわからない部分もあるけれども、少なくともそれに対して良い方向に進んでいけるよ



うな場にしたい。お寺が命のベースとしての役割を持ち、関わる人に自分の人生や一生をそこにプロットしていきたいという思いを持ってもらいたいと思います。

そういう人と、私たち見樹院が持っている1つの将来へのビジョンを共有しつつ、思いを持った人とつながりながら生活をしていく。そうした思いを共有しているという実感を持ったコミュニティができていったら、多くの人にとっての幸せにつながるんじゃないかなと思います。

＜プロジェクト応援者募集！＞

これから見樹院と未来バンクユースチーム、天然住宅の有志で「見樹院PJ」の準備会を行います。関心のある方は未来バンク事務局までお問い合わせください。

＜取材希望者募集！＞

ニュースレターで取り上げてほしい活動などあれば、未来バンク事務局宛にご連絡ください。順次、お伺いいたします。



2019年度定期総会を開催しました

未来バンクは、2020年9月26日に定期総会を開催しました。

全出資口数 1億9345万9230口、出席口数（議長委任、その他委任を含む）1億3005万0358口、全体の67.2%で過半数を超えたため総会は成立し、また全議案について承認されたことをご報告します。

年に一度の総会は、組合員の皆さまと顔を合わせ、活動報告をお伝えし、今後の活動に対して率直なご意見を賜るところではございますが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、組合員の安全を第一に考え、オンラインでの総会となりました。

オンラインになったことで、距離の離れている方にもご参加していただき、いろいろなご意見やアドバイスを賜り、今後の活動のエネルギーになりましたし、元気づけられました。今回のようなオンラインでの交流は、総会のみならず、今後も積極的に活用していきたいと思えます。

2019年度も環境・市民事業・福祉に関して有用性の高い活動への事業融資、自然素材住宅の購入者に向けた住宅ローンのつなぎ融資、または一部融資等を通して、組合員の皆さまからの出資金が融資先、社会に対し、どう役立ち、活かされているのか、実感してもらえよう精進してまいります。

<決議事項>

- ・議案第一号 2019年度事業報告・決算報告
- ・議案第二号 2020年度事業計画案
- ・議案第三号 音信不通による組合員の脱退

<ご意見や質疑応答>

○議案第三号 音信不通による組合員の脱退

「出資金の払戻金についての請求権は、民法の定めるところにより時効が成立する」という表現は、時効で請求権がすぐさま消失する印象を与える。

回答）信用金庫と同じように10年程度の消滅時効期間を設けるなど、次期総会では期間を明記するよう検討をしていく。

○2019年度にあった人件費が2020年度予算にないのはなぜか。

回答）2020年度の人件費は活動費に含まれている。活動費から交通費、会議室代、証明書等の諸費用を引いたものを、人件費として支出する。

○今後実現したい活動にある難民支援について特に支持します！

○奨学金借り換え融資、モデルケースとして1件でも実現させて下さい！

○若い力が加わり、新たな活動が芽吹いているようで楽しみです。頑張ってください！

未来バンクとは

市民が組合員となって出資していただいた資金を、環境・市民事業・福祉の目的に関して、市民やNPO団体・法人が起す社会的有用性の高い事業や取り組みに対し「融資」という方法で支援することを目的に設立された、市民による市民のための非営利バンクです。

出資者のみなさまの夢のこもったお金を通じて、想いと人をつなぎ、住みよい未来を育てていきます。

融資実績

融資累計件数：436件 融資累計額：約14億28百万円（2020年11月時点）

2020年6月～11月 融資件数：4件 融資計額：3,540万円

融資の申し込みをご検討の方は、ウェブサイト内の「融資を受ける」をご覧ください。お問い合わせをお待ちしています。

<https://mirai-bank.org/loan/>



未来バンクの趣旨にご賛同いただける方は、出資をご検討ください。詳細はウェブサイト内の「出資・応援する」をご覧ください。

<https://mirai-bank.org/investment/>



未来バンクニュースレター 第5号

発行・編集：未来バンク事務局

発行日：2020年12月

 未来バンク
MIRAI BANK

連絡先：〒132-0033

東京都江戸川区東小松川3-35-13-204

市民共同事務所「市民ファーム」内

TEL/ FAX：03-3654-9188

HP：<https://mirai-bank.org/>

MAIL：info@mirai-bank.org